

『グローバル天理』第12号（通巻36号）掲載論文要旨

井上昭夫「拉致問題と「グローバル」マインド」

一時帰国した北朝鮮の拉致被害者を約束通り戻すべきか戻さざるべきかで、日朝交渉が暗礁に乗り上げている。拉致被害者個人の幸福が優先か、国家全体の利害が優先かがいま問われている。しかし、考えてみれば、拉致問題は、臓器移植の賛否 両論をめぐる生命倫理の問題とも共通点を持っている。つまり、国際政治においても、生命倫理においても、その問題の根底に、個と全体、ローカルとグローバル、特殊と普遍の緊張関係が存在しているのである。ここにおいても二者択一ではなくて、両者を包摂する考え方、グローバルな「二つ一つ」の知恵が求められている。

荒川善廣「「元の理」の探究（20）—神と世界〔4〕」

親神が泥海中を見澄すということは、永遠の次元で親神が自己を直視(envisage) することの意味する。これによってもたらされるのは、十全の守護の理であり、有効な可能性(potentialities)の体系である。それと同時に、親神自身、月日親神という立場から親神天理王命という立場に充実する。この永遠の次元における直視は一回だけおこなわれ、この一回性(Einmaligkeit)の地理的空間的世界への投影がちばという一地点である。「天理王命」の神名がちばに授けられたのは、この直視の一回性に基づいている。

堀内みどり「天理異文化伝道（34）天理教のコンゴ伝道〔33〕—復興と展望」

激しい内乱では、教会につながる人々も多大な被害を被った。しかし、その中にあって、コンゴでは自主的な信仰活動がなされていた。中心となっているのは、第二世代の人々だった。コンゴ40年の歴史を振り返り、常に動乱に曝されている地域でも活動の在り方を考えなくてはならない。終わりに際し、海外布教をするにあたり、1. 現地との相互理解、2. ことばの習熟と翻訳の重要性、3. 人材育成については、特に重要な課題であることを指摘しておく。

宮田 元「宗教・スポーツ・教育（16）—宗教とスポーツ〔14〕」

スポーツ競技にとってフェアプレーは伝統的に中核をなすものとみられてきている。古代社会におけるスポーツの理念は、名誉ある正しい振舞いに強調点をおく戦士のエートス

と密接に結びつけられていた。古代オリンピックの競技者も、戦士と同じように、神々の前で勝利と名誉を求めて努力した。成績によって競技者を等級づけるという考えは、機会の平等を必要とした。フェアプレーの概念は次第に発展し、標準的なものとして、競技にみられる道徳的に正しい、よい行動を指示するようになる。ここに正しいスポーツとよいスポーツが考えられてくる。よいスポーツには最適の緊張が伴う。そのためには、競技はフェアプレーを必要条件として進められねばならない。ローランド (S. Loland) は、フェアプレーの基準によってスポーツが行われるとき、スポーツは人類の繁栄のために一つの活動の場を供給するという独自の可能性をもつとみる。天理教の中山正善二代真柱は、優れた宗教者であるとともに、スポーツのよき理解者であった。人間にとって、心が明朗であり、身体が健康であることほど幸福なことはないとし、健全な体躯と健全な心を養うことにこそ教えの意義があり、人生の意義があるとして、スポーツによっても、健全な心身を作り、世界の人類が陽気ぐらしの日々を送ることができるよう努めることを期待した。

末延岑生「ことばと教育 (21) —ことばの元を探る [21]」

内臓の不随意筋の助けによって、脳幹において無感動から「感動」の世界へ開かれると同時に「惜しい・欲しい」の心が生まれる。そして大脳辺縁系において「喜び」の心とともに「憎い・かわい」の心が、そして大脳皮質では「感謝」の心とともに「恨み・腹立ち」の心が生まれ、ここまでは動物的で、言語不要のレベルといえる。そして最後に、内臓と手足の随意筋の助けによって、大脳新皮質では人間の究極の目標である成人への総仕上げとして「報恩」の心とともに「欲・高慢」の心が生まれる。ここではじめて言語の必要性がでてくると考えられる。人間と動物との違いは、人間には「感謝」と「報恩」が伴うことである。

以上、本稿をまとめると、人間は八千八度の生まれ変わりを繰り返すあいだに、どうしても避けきれない“病の元”としての8つのほこり、すなわち、「惜しい・欲しい」「憎い・可愛い」「恨み・腹立ち」「欲・高慢」と、“陽気ぐらしの元”ともいえる「感動」「喜び」「感謝」「報恩」との葛藤の中で、「幼年期」「青年期」「壮年期」「老年期」を繰り返し、その中でことばは生成されてきたと考える。ことばは以上のように私たちが創造した神によって仕込まれ、それをもとに私たちが心の思い通りに造り上げてきたものである。こうしたことばを、人はお互いに陽気ぐらしの道具として用いる。それを神は見て人間とともに楽しむ、神人和楽の世界である。

最後に結論として、

1) ことばは人間に借り物としての身体の自由が与えられただけでなく、心の遣い方の自

由が与えられていてこそ生まれたものである。人間の身体も心もことばをも支配するような神から自由なことばが生まれる、という考えには非常に無理がある。従来の数多の神授説がいずれも失敗に終わったのは、このところに無理があったのが原因であると考え。

2) 陽気ぐらしの中から陽気なことばが生まれ、病や苦しみの中からは苦しみのことばが生まれる。ほこりの中からほこりのことばが生まれ、感動、喜び、感謝、報恩の心からもそれぞれのことばが生まれた。

3) 心のことばは脳と内臓で仕込まれ、生成され、行動のことばはこうした内臓での心の仕込みを通じて、四肢を中心とした動きをもとに仕込まれ、生成されたものと思われる。

4) 人は心の遣い方、身体の使い方の自由が与えられているが、そこには当然自己責任が伴う。つまり、それらのつかい方を誤ると、病を得る。しかし、人はそれによってより高い成人の道をたどり、その度合いに応じてことばもさらに洗練されてゆく。

佐藤浩司「天理教東南アジア伝道誌(17)―戦前のシンガポール伝道[4]」

板倉タカの出直後、熱心な信者の一人であった馬場トクが、大正15年(1926年)10月5日に、二代会長に就任した。タカの出直により、抛り所を失って一時は茫然となっていた教会にも、活気が戻ってきた。昭和9年、上級の馬谷市松が御目標を捧持して、シンガポールへやってくると、信者の意気も上がった。しかし、日本が戦争へと傾斜していきにしたがい、シンガポールにおける布教活動もままならなくなった。ついには、馬場会長をはじめ主立ったものが、インドへの抑留を余儀なくされた。

小滝 透「天理比較神秘論への試み(36)―文明について[2]」

今回は、日本文明史上における仏教の日本化の意味と、幕末維新期における新宗教台頭の意味を考えてみた。そして前者を日本文明の誕生とし、後者を近代産業社会に対する応戦として捉えてみた。

小林正佳「芸術・癒し・宗教(35)―変容への一歩」

芸術と癒しと宗教には単なる偶然という以上の本来的な重なりがある。三つの営みには、常に変容の体験が含まれている。この論考では、そうした変容に連なる体験伝達の過程に注目してきた。特にここでは、体験の伝承を考える典型的な場面として、民俗舞踊の仕組みを語ってきた。

どうして民俗舞踊がモデルとなり得るのか。動きの原則があくまで自然であること、従

って、その動きが多くの人々に対して開かれていること、さらには、音と動きが相互に喚起しあうダイナミックな仕組みが備わっていることといった特性にもまして、ここでは、自分が自由気ままに動くというより決まった定型に従って動くこと自体、一つの関係の中に身をおき積極的に自己を肯定することに繋がるという点を改めて強調しておきたい。

民俗舞踊を踊る人間は、今の自分に連なる人間関係を引き受け、そのことで、そうした関係に連なるものとして自らを受け容れる。そんな自己肯定の在り方が、踊りと癒しを最も根底的なところで繋いでいるような気がする。

塩澤千秋「脳死・臓器移植—カナダ通信（26）臓器移植研究まとめ」

命を守るべく研究、開発されて来た医学がその運用により守るべき命を危うくし、生の始まりや死を曖昧にしている。そして更に人間の生物定義をしなければならない状態に人間を追い込みかねない。これに警鐘を鳴らし、医学研究の行くべき方向を示すが宗教家ではないだろうか。

上杉武夫「都市の再生に向けて—アメリカ通信（24）グリーンセンチュリーの意味するもの」

今回は2002年のヨハネスブルグにおける環境サミットやアメリカのEPA（環境保全局）などの動きをもとに、21世紀細大の課題である「緑の世紀」について考える。「緑の世紀」とは、新しい倫理と技術による生活様式の改革を求める「緑の革命」と同義的であり、持続可能な生活様式・社会は21世紀の重要な課題となるだろう。生活の質と物理的環境をつなぐ糸は生活の仕方そのものにあり、それを支える倫理の高揚が急務だ。

金子 昭「天理経営学—その歴史・哲学・展望—（20） 教学編 天理経営学とは [5] 一手一つのマネジメント」

2002年のノーベル化学賞を受賞した田中耕一氏は、その記念講演の中で、今回の業績は4人の同僚のチームワークの賜物であると語った。一民間企業の研究スタッフが見せた快挙は、天理教の言葉を用いれば「一手一つ」の働きであったと言えよう。たとえ一人ひとりとは平凡であっても、互いに協力することで、単なる人数の総和以上の力を出していくことができる。天理に基づく経営の醍醐味は、まさにここにある。

金子珠理「ジェンダー女性学情報（27） 生殖技術とジェンダー [5] 」

1994年にカイロで行われた国際人口開発会議(the International Conference on Population and Development)において採択されたリプロダクティブ・ヘルス/ライツ (rights) 概念が国際政治経済の変遷の中でどのようにして成立してきたのかを概観する。その成立の背景にはフェミニズム運動と人口エスタブリッシュメントとの戦略的同盟関係があった。

特別掲載：第2回天理スポーツ・ギャラリー展関連シンポジウム 2002(8) パネルディスカッション「天理ラグビーの真髄と人材育成」総括 [2]

本稿は、井上昭夫おやさと研究所長による、シンポジウム「天理ラグビーの真髄と人材育成」に関する総括の内容である。講演の内容、そしてパネル討論より導かれた諸見解に対し、それぞれ感想を述べながら、独自の 見解を加えられた。「スポーツの本質や真髄」、「天理スポーツのあり方」「天理スポーツ学の視点」といった観点について、「スポーツの語源」や「元初まり の話」をベースとしながら、総論が展開されている。